

一般論文

受付 2001.10.3
受理 2001.11.29

自他の関係性と相対的比較について — 自発的特性生成法を用いた測定に基づいて —

吉原 智恵子

日本福祉大学 情報社会科学部

Self-other relationship and relative comparison : Based on the spontaneous trait generation task

Chieko Yoshihara

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract: Relative comparisons between close friends, and also acquaintances in everyday life were examined. Ninety-seven students answered the questionnaire using the spontaneous trait generation task by Deutsh and Mackecy(1985), and Deutsh, Sullivan, Sage, and Basil(1991). The scores of relative comparison between close friends were greater than those between acquaintances. This result was consistent with former studies'. Also it was interpreted as that the close friend who was chosen by an individual spontaneously, had an important role on reorganization of cognitive schema and identity formation in adolescence. Furthermore, the method of the task was discussed.

Keywords: self-other relationship, relative comparison, reorganization of cognitive schema, close friend, spontaneous trait generation task

1. はじめに

自己認知と他者認知の相互規定的関係性は、古くから社会心理学の重要な研究テーマのひとつであったといえよう。James, Meadらの創始的研究はいずれも、自己が他者の視点を取り入れるところから発生することを仮定し、社会的存在としての「自己」をとらえている。これらの研究はその後の自他認知に関する研究の基礎を築き、そして今日では様々な潮流が派生している(スキーマ理論に基づいた研究: eg. Markus & Smith, 1981¹⁾; Shrauger & Patterson, 1974²⁾; 肯定的バイアスに関する研究: eg. Taylor & Brown, 1988³⁾, 1994⁴⁾; 集団間関係において生じる同化・対比効果に関する研究: eg. Biernat, Manis, &

Kobrynowicz, 1997⁵⁾; Brewer & Weber, 1994⁶⁾等)。これらはいずれも、自己と他者との相対的比較に基づく相対的關係性(の認知)が、自己認知および他者認知を規定していることを示している。

さらに、他者との比較を直接的に論じた社会的比較理論(Festinger, 1954)⁷⁾では、類似した他者との比較により、社会生活上の自己を明確に位置づけること、および自己の妥当性を明確に知ることが可能になることが仮定されてきた。以上から、他者との相対的比較は、自らを知るための必要条件となっていると考えることができよう。

また杉村(1998)⁸⁾は、エリクソンのアイデンティティ理論をもとに、重要他者(significant others)

の視点の取り入れが青年期のアイデンティティ形成に不可欠な過程であると論じている。上記杉村によれば、アイデンティティ形成は自分自身の視点と他者の視点を知り、他者の視点を取り入れる過程であり、この両者の視点の葛藤を調節することがアイデンティティ形成を促進させると主張している。つまり、この時期の社会的関係の中で特に重要他者として位置づけられる他者と自己とを相対化し、他者の視点を自己の視点に取り入れる調節作用の生起が、自己に関する枠組みであるアイデンティティの形成に重要であることが予測されている。

また、自他認知の相互規定性について、未知の他者との間においてもコミュニケーション過程を経ることにより互いの認知的図式*を調節し合えることを示した研究もある。例えばDeutsh and Mackecy (1985)⁹⁾は、実験室内で未知の他者とともに、第三者の印象について話し合うことにより、自己スキーマが類似してくることを示した。またさらに、このパートナーの自己スキーマを反映させた認知者自身の自己スキーマを、自己および第三者を評価する際の評価基準として適用することを、自発的特性生成課題 (spontaneous trait generation task) を使用して明らかにした。この課題は、自己および他者の二者を表現するのにふさわしい言葉を10語それぞれリストアップし、重複する同語、反意語、同義語の数を得点化するものである。したがって、評価次元の共通性を示す指標となるものと考えられている。他方、このようなコミュニケーションが既知の友人同士であった場合には、未知の人であった場合よりも相互の自己スキーマの影響がより強いことも示された。このDeutshら (1985) の実験は実験室内で人工的な環境下で行われたものであるのに対して、続くDeutsh, Sullivan, Sage, and Basil (1991)¹⁰⁾では、実際の社会生活において同様の効果が見られるかどうかを調べている。彼女らは大学寮内において調査を行い、大学1年生の入学して間もないルームメイト同士でコミュニケーション経験が蓄積されることにより、両者の自己スキーマが類似してくることを、また、自己評価自体が類似してくることを示した。これらの研究は、コミュニケーションを通して他者の自己スキーマの構造を自分自身の自己スキーマに取り入れる過程を検証している。他者の自己スキーマの構造を自分自身の自己スキーマに取り入れることは、相

手の意見を聞き、相手の視点にたつこと、すなわち相手の視点に自己の視点を重ねることが可能であってはじめて成り立つといえよう。例えばおとなからのメッセージを幼児に伝える場合には、幼児の視点に立って、幼児に理解可能な事物を例示しながら伝えることは一般的によく見られるが、これは相手の認知的枠組みに視点を置き換えている一例であると考えられる。このような、相手の視点に自己の視点を重ね合わせる認知過程を経て始めて、相手の視点を自己の視点に取り入れることが可能になると仮定できるように思われる (cf. 永田, 1985)¹¹⁾。既知の友人同士であった場合には、未知の人同士であった場合よりも相互の自己スキーマの調節がより強くなったという上記の結果は、既知の友人の視点に対する理解の容易さを反映していると考えられるのではないだろうか。

Deutschら (1985,1991) の研究では、実験統制下でのコミュニケーション、割り当てられたルームメイトとのコミュニケーション、という自発的・自然発生的でない状況下において、二者間の認知的図式の調節過程が検証されている。しかし、我々を取り巻く社会的関係、特に重要他者となり得る親しい友人との関係の継続は、ほとんどが自発的な動機に基づいて築かれているとあってよいであろう。そこで、そのような自発的な関係性の中で、互いの視点や自己スキーマ、すなわち認知的図式というものを調節しあうことを検証する必要がある。本研究では、自発的な関係をもつ他者との関係性に焦点を当てる。そして、自己認知の認知的図式そのものの変容に深くかかわる他者として、親しい友人がその役割を担っているかどうか、つまり、知人と比べて自他の相対的比較による両者の位置づけが生じているかどうかを、自発的特性生成法を用いて確認することを目的とする。

また、Deutshら (1985) は自発的特性生成法において10語による自己記述および他者記述を求め、両者の回答の同語、反意語、類義語の数を得点化したが、Deutshら (1991) では、同語の数だけを得点化した。本研究では、後者において、より明確な指標とするために同語だけを採用したことを踏襲するが、自他の相対化が生じているかどうかを確認する際には反意語も重要な指標になり得ると考え、同語および反意語の数を得点とする。さらに、予備調査により10語すべてのリストアップは回答者の負担が大きく、回答が欠ける

ケースが増加することが予測されたため、6語の回答を求めることにする。

2. 方法

2.1 対象

対象者は学習院大学および上智大学の学生110名(男性44名, 女性67名), 平均年齢は20.2歳であった。また, 回答に欠損があったものを除いた有効対象者数は97名(男性36名, 女性61名)となった。

2.2 質問紙の概要

本研究で報告する内容は自発的特性生成法の部分に限定するが, 質問紙全体の構成は, 自己認知と他者認知の相対的比較に関する他の質問項目を含んでいた(他の結果についてはYoshihara (1999)¹²⁾において報告した)。自発的特性生成法はDeutsh and Mackecy (1985)において行われた教示を参考に, 自己と他者とを表現する言葉6語の回答を求めた。

2.3 質問紙の構成と手続き

他者の記述に関しては「親しい友人」について回答する群と, 「知人」について回答する群の2群を設定した。まず各群共通して, 自己について表現する語(パーソナリティをあらわすのによくあてはまる言葉)を6語あげるように, 例をあげて指示した。そして各群の他者の設定に該当する人物ひとりを想起させ, その人物のイニシャルとつきあいの長さを記入し, 当該他者を表現する語を6語あげるように求めた。なお, 自己に関する回答と他者についての回答の間には他の質問項目が配置され, 先行する回答の記憶が効果をもたないように配慮された上, すでに終了したページにもどって回答を見ることがないように教示した。質問紙は無記名式で実施した。

3. 結果

「親しい友人」群のつきあいの長さの中央値は3年(範囲: 16.25年, 5ヶ月から16年8ヶ月まで), 「知人」群は10ヶ月(範囲: 12.75年, 1ヶ月から12年10ヶ月まで)であった。回答が6語すべて埋まらなかった回答者のデータは除き, それぞれの群の有効データ数は, 「親しい友人」群48, 「知人」群49となった。

自己および他者の回答の同語, 反意語の重複数を得

点として, 2群間の平均値の差の検定を行ったところ有意差がみられ($t(95)=3.02, p<.003$), 「親しい友人」群の方がより得点が高いことが明らかになった(親しい友人群: $M=1.31, SD=1.04$; 知人群: $M=0.71, SD=0.89$)。したがって, 親しい友人と自己との評価次元の重複は, 知人と自己との場合よりも多いことが示された(図1参照)。

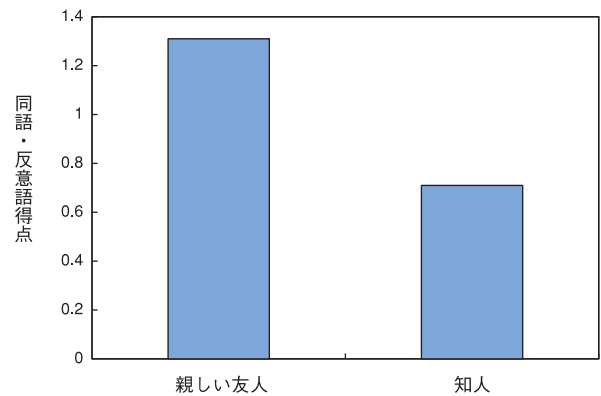


図1 各群の同語・反意語得点

また図2, 図3は, 各群において回答者2例から得られた「自己を評価する語」と「他者(図2: 親しい友人, 図3: 知人)を評価する語」に見られる同語, 反意語の重複を示したものである。これらの例は必ずしも各群の平均例であるとはいえないが, 自発的特性生成課題の回答例としての典型性を示すものである。

4. 考察と展望

予測は支持され, 「親しい友人」群のほうが「知人」群よりも, 自他を評価する語の重複が有意に多いことが明らかになった。したがって, Deutschら(1985, 1991)が示した環境的な制約下にある関係ばかりではなく, 関係の継続性が自発的な動機づけに基づく親しい友人との関係においても, 自他の相対的比較によって互いが位置づけられていることが確認された。このことは, より一般的な日常の友人関係において, 親しい他者と自己とを相対視する視点をもつ関係が成り立っていること, また同時に, 親しい他者との間に互いの自己認知を規定しあう関係が成り立っていることを示しているといえよう。さらにこのような関係性が確認されたことは, 互いの自己スキーマの再構造化に影響を及ぼしあっている可能性が予見される。冒頭に述

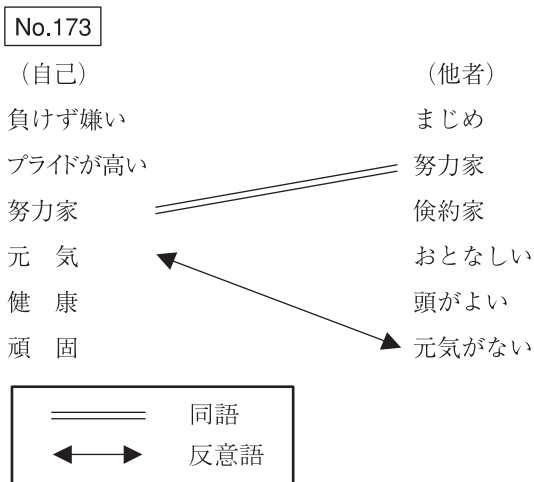
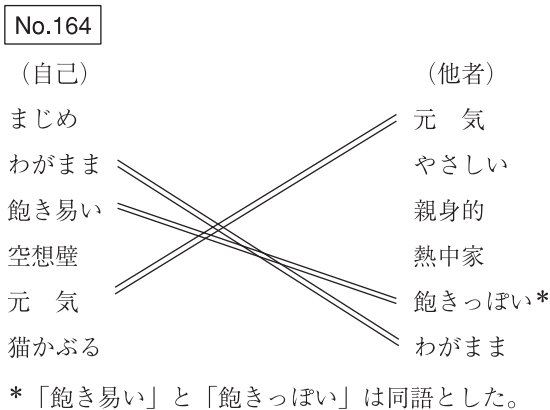


図2 自己評価、親しい友人への評価にみる同語・反意語

べたように、相対的な比較に基づく自他の相対的關係性（の認知）が自己認知、他者認知を相互的に規定していることは自己研究の当初より予測されている。青年期において親しい友人との相対的比較がとりわけ活性化されている様子が見られたことは、杉村（1998）において論じられたように、アイデンティティ形成のため、自発的・継続的な親しい友人が重要他者としての役割を果たしていることを示唆しているように思われる。

両群のつきあいの期間には差が見られるため時間的経過を統制することが望まれるが、Deutschら（1985）の実験では、実験室での短い時間のコミュニケーションでも共通する評価次元を得ることが可能であることが示されている。そこで、今回の「知人」群の得点平均が1を下回り、「親しい友人」群との差が見られたことは、両者の関係性の違いによるものであると推測されよう。

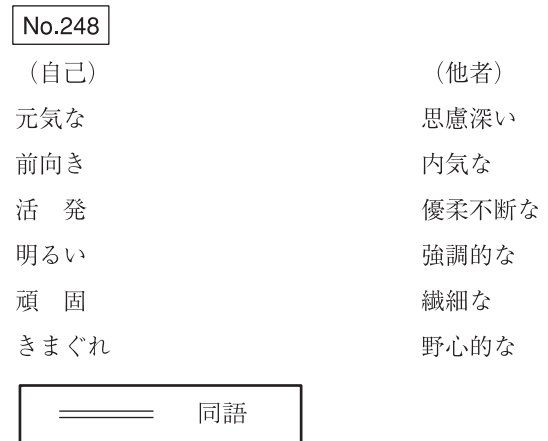
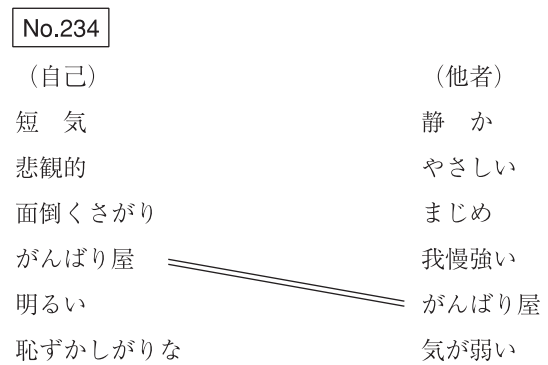


図3 自己評価、知人への評価にみる同語・反意語

また、自発的特性生成課題の回答数は、欠損データを最小にするため6語を採用したが、その結果、欠損データの割合は全体の11.8%にとどまった。10語を採用した場合にはさらに欠損データが増加することが考えられる。さらに今回の回答の分布から、同語、反意語の得点化が可能であったことをあわせて考慮すると、自他に関する評価次元の重複を測定するには妥当な数だったのではないと思われる。

今後、縦断的データを測定することにより、より長い期間での調査から、自然発生的で自発的継続に基づく関係における自己スキーマの調節の変遷を調べる必要があるであろう。これにより、自他の相対的關係性において互いの認知的図式がどのように調節され、どのように変容していくのか、その詳細な自他認知の相互規定性を調べるのが可能になるであろう。さらに、自己スキーマといった自己に関する認知的図式に関わらず、意見や信念といった価値的態度に関する認知的図式に関しても同様の自他関係と認知的過程が存在するのかどうか、あるいは異なる関係の諸相と認知過程

が存在するのかどうかを調べることも重要であろう。個人の考え方の枠組みが行動を規定するとすれば、このような認知的図式の変革の過程を明らかにすることは、多くの示唆に富むものと考えられる。例えば、成人における考え方の枠組みの硬直性・柔軟性の問題について、また、歪曲した信念に基づく社会的行動、例えば偏見や異文化摩擦に基づく反社会的行動等の問題について、理解する一助となり得るであろう。

文献

- 1) H. Markus & J. Smith : The influence of self-schema on the perception of others. In N. Canter, & J. F. Kihlstrom (Eds.) *Personality, cognition, and social interaction*. Lawrence Erlbaum Associates. pp. 233-262 (1981)
- 2) J. S. Shrauger & M. B. Patterson : Self-evaluation and the selection of dimensions for evaluating others. *Journal of Psychology*, 42, pp. 569-585 (1974)
- 3) S. E. Taylor & J. D. Brown : Illusion and well-being : A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103 (2), pp. 193-210 (1988)
- 4) S. E. Taylor & J. D. Brown : Positive illusion and well-being revisited : Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, 116 (1), pp. 21-27 (1994)
- 5) M. Biernat, M. Manis, & D. Kobrynowicz : Simultaneous assimilation and contrast effects in judgments of self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73 (2), pp. 254-269 (1997)
- 6) M. B. Brewer, & J. G. Weber : Self-evaluation effects of interpersonal versus intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66 (2), pp. 268-275 (1994)
- 7) L. Festinger : A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, pp. 117-140 (1954)
- 8) 杉村和美 : 青年期におけるアイデンティティの形成 : 関係性の観点からのとらえ直し. 発達心理学研究, 9 (1), pp. 45-55 (1998)
- 9) F. M. Deutsch, & M. E. Mackesy : Friendship and the development of self-schemas : The effects of talking about others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11 (4), pp. 399-408 (1985)
- 10) F. M. Deutsch, L. Sullivan, & N. Basile : The relations among talking, liking, and similarity between friends. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17 (4), pp. 406-411 (1991)
- 11) 永田良昭 : 対人的コミュニケーションの諸相とその成立過程の研究. 昭和59年度科学研究費補助金 (一般研究C) 研究成果報告書 (1984)
- 12) C. Yoshihara-Tanaka : Relative comparison between self and close friend. *Proceedings of the 3rd Asian Association of Social Psychology*, pp. 270-271 (1999)

脚注

- * 本稿では、スキーマ、認知的図式を同義として扱い、認知的枠組みという表現はスキーマ及び認知的図式を含む総称として扱う。